

# 保育所実習における学生の自己評価のあり方について

相浦 雅子 高濱 正文 後藤 善友 倉光 美保

About the Ideal Way of the Self-Evaluation of the Student  
in the Day Care Center Training

Masako AIURA Masafumi TAKAHAMA Yoshitomo GOTO Miho KURAMITSU

## 【要 旨】

保育実習における実習指導のあり方について本学の取り組みを振り返り、より効果的な実習指導の方法を検討する。特に、園評価との関連性から学生自身による自己評価の有効性を探り今後の実習指導のあり方を再考していく。

本学独自で行った自己チェック表の導入により導入以前の2年間と導入後の2年間との比較では自己チェック表を導入した年度が保育実習Ⅰから園評価は高く、保育実習Ⅱにおいてもさらに上昇するという結果が得られた。

## はじめに

保育士養成において「保育所実習」は主軸となるものであるが、全国保育士養成協議会が策定した『保育実習指導のミニマムスタンダード』の中でも「保育士養成における学生の専門的成長の中核は、実践的問題が生起する保育実習の場にある」<sup>1</sup>と実習の意義については述べられている。保育士養成における質的向上に向けた「保育所実習指導」の充実をめざし、これまで様々な取り組みを実施してきた。中でも保育所実習での学生の成長を図る指標のひとつである評価票に関しては、評価項目の精査や実習後、評価票を基にした「評価票面接」の実施をしてきたが、それらによる学生の実習における成果がどれほどまでに出ているのかの検証には至っていなかった。

こうした状況の中で2009（平成21）年2月の「保育実習Ⅰ（保育所）」より、学生自身が実習の中で評価票に挙げられている評価項目を毎日、自己評価する取組みとして『本日の私の実習チェック表』（表1参照）を日誌の巻末に取り入れた。この自己評価の取組みのねらいは、保育士としての力量を図る評価項目の内容を日々、意識しながら実習に臨み、一日一日を振り返りながら、次の課題や目標を明確にすること、さらには実習後、実習を振り返る際の資料として用いることを目的として導入した。自己評価をすることによって、実習自体にどのような成果が見られるのかを検証する。

## 実習の意義

平成20年の保育所保育指針の改定に伴い、平成22年保育士養成課程等の改正が行われた。保

育士養成課程等検討委員会の報告には、第1部 保育士養成課程及び保育士試験の改正の中で、改正・見直しの背景として、①保育士養成の現状 ②保育現場の状況があげられており、特に、子どもを取り巻く環境の変化や保護者の就労状況の多様化に対応するために、保育士の専門性の資質向上や保育所の組織的対応が求められているとしている。改正の経緯としては、①保育所保育指針の改定 ②保育所における質の向上のためのアクションプログラム ③保育サービスの質に関する調査研究 ④社会保障審議会少子化対策特別部会 があげられている。特に、今回、保育所保育指針が告示化されたことにより、保育指針の内容を踏まえた養成課程の見直しが必要とされている。改正に当たっての基本的考え方として、保育現場の実践や保育士の専門性を十分に踏まえた内容、実習受け入れ施設の範囲や要件の見直し、設置及び履修総単位数、養成課程、について書かれている。実習については、「保育現場の実情を踏まえ、実践力や応用力を持った保育士を養成するため、実習や実習指導の充実を図り、より効果的な保育実習にすることが必要である。」としている。改正の内容で、⑤単位数の変更に保育実習については、

「保育実習Ⅰ」「保育実習指導」計5単位を「保育実習Ⅰ」4単位と「保育実習指導」2単位とする。また、選択必修科目である「保育実習Ⅱ又はⅢ」にも「保育実習指導Ⅱ又はⅢ」の1単位を加える。

保育実習Ⅱにおける事前事後指導の充実により実習による学びを強化させ、効果的学習を行うことができるようにするために、3回の保育実習のそれぞれに実習指導を行うこととする。」と示されている。

また、第2部 保育士養成課程等における今後の検討課題の中で、養成施設と保育現場等との連携に、「(1)養成課程における保育実習の位置づけを高め、より効果的な実習とするためには、養成施設と実習受け入れ施設との連携が欠かせない。保育実習先における教員の訪問指導の充実や学生、保育士、教員による一定の時間

の話し合い等の実施により相互理解が図られることが重要であり、実習評価の基準を保育士の協力により策定するなどの工夫も検討すべきである。なお、その際、受け入れ施設や保育士の負担増について、一定の配慮も必要である。」と、保育実習について掲げられている。

このように、今回の保育所保育指針の告示化に伴う保育士養成課程の改定の中で、保育実習および保育実習指導は養成教科目の中でもコアな位置づけにある。学外で行われる保育実習に対し学生が主体的に取り組み、より効果的に学習効果を得るためには、学内で行われる事前事後の実習指導の在り方が重要である。それは、平成23年度からの保育士養成課程において、実習指導が科目として独立し単位数も増えていることからわかる。そこで、実習指導の強化を図るためには、どのような方法があるのかの検討は必至である。

では、学生は養成課程において実習で何を学ぶのか。保育実習は、「学生が保育の実践・観察を体験することで、専門職の目的・価値・倫理などについての理解と自覚を深め、保育者としての使命感や実践力の基礎をいっそう高める場として機能するものである。」(2005年9月、保育士養成資料第42号)さらに、保育現場と保育士養成校との協働で行う次世代育成の場でもある。その目的を達成するためには、実習指導のプログラムは学生が主体的にその目的を達成しうよう綿密かつ系統立てたものでなくてはならないのである。

保育現場では、多様化する保育ニーズや子どもの状況に適切に対応できる保育士が求められている。そのため、保育所保育指針にも保育士の資質向上について「自己研鑽」「自己評価」が明記され、保育士は「反省的实践家」であることが望まれている。保育課程を踏まえた保育のねらい、子どもの姿、保育士自身の保育行為をどのような視点において振り返るのか、また、保育状況をエピソードとして捉え省察をいかに深められるかが身につけている者が、「反省的实践家」と言えるのではないだろうか。その資質を保育実習を通してどのように学生に

培っていくのか、実習指導の在り方が問われるところである。厚生労働省から2010年6月日に通知された「指定保育士養成施設の指定及び運営の基準について」の「教科目の教授内容」の「保育実習Ⅰ」「保育実習指導Ⅰ」「保育実習Ⅱ」

「保育実習指導Ⅱ及びⅢ」には、全てにおいて「自己評価」の文言が示されている。実習や実習指導において、学生自身による自己評価の深化を図ることが養成校に課せられた課題といえよう。

表1 教科目の改正教授内容（保育所実習のみ）

<p>〈科目名〉 保育実習Ⅰ（実習・4単位：保育所実習2単位・施設実習2単位）</p>
<p>〈目 標〉</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 保育所、児童福祉施設等の役割や機能を具体的に理解する。</li> <li>2. 観察やかかわりを通して子どもへの理解を深める。</li> <li>3. 既習の教科の内容を踏まえ、子どもの保育及び保護者への支援について総合的に学ぶ。</li> <li>4. 保育の計画、観察、記録及び自己評価等について具体的に理解する。</li> <li>5. 保育士の業務内容や職業倫理について具体的に学ぶ。</li> </ol>
<p>〈保育所実習の内容〉</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 保育所の役割と機能             <ol style="list-style-type: none"> <li>(1) 保育所の生活と一日の流れ</li> <li>(2) 保育所保育指針の理解と保育の展開</li> </ol> </li> <li>2. 子ども理解             <ol style="list-style-type: none"> <li>(1) 子どもの観察とその記録による理解</li> <li>(2) 子どもの発達過程の理解</li> <li>(3) 子どもへの援助やかかわり</li> </ol> </li> <li>3. 保育内容・保育環境             <ol style="list-style-type: none"> <li>(1) 保育の計画に基づく保育内容</li> <li>(2) 子どもの発達過程に応じた保育内容</li> <li>(3) 子どもの生活や遊びと保育環境</li> <li>(4) 子どもの健康と安全</li> </ol> </li> <li>4. 保育の計画、観察、記録             <ol style="list-style-type: none"> <li>(1) 保育課程と指導計画の理解と活用</li> <li>(2) 記録に基づく省察と自己評価</li> </ol> </li> <li>5. 専門職としての保育士の役割と職業倫理             <ol style="list-style-type: none"> <li>(1) 保育士の職業内容</li> <li>(2) 職員間の役割分担や連携</li> <li>(3) 保育士の役割と職業倫理</li> </ol> </li> </ol>

<p>〈科目名〉 保育実習指導Ⅰ（演習・2単位）</p>
<p>〈目 標〉</p> <ol style="list-style-type: none"><li>1. 保育実習の意義・目的を理解する。</li><li>2. 実習の内容を理解し、自らの課題を明確にする。</li><li>3. 実習施設における子どもの人権と最善の利益の考慮、プライバシーの保護と守秘義務等について理解する。</li><li>4. 実習の計画、実践、観察、記録、評価の方法や内容について具体的に理解する。</li><li>5. 実習の事後指導を通して、実習の総括と自己評価を行い、新たな課題や学習目標を明確にする。</li></ol>
<p>〈内 容〉</p> <ol style="list-style-type: none"><li>1. 保育実習の意義<ol style="list-style-type: none"><li>(1) 実習の目的</li><li>(2) 実習の概要</li></ol></li><li>2. 実習の内容と課題の明確化<ol style="list-style-type: none"><li>(1) 実習の内容</li><li>(2) 実習の課題</li></ol></li><li>3. 実習に関する留意事項<ol style="list-style-type: none"><li>(1) 子どもの人権と最善の利益の考慮</li><li>(2) プライバシーの保護と守秘義務</li><li>(3) 実習生としての心構え</li></ol></li><li>4. 実習の計画と記録<ol style="list-style-type: none"><li>(1) 実習における計画と実践</li><li>(2) 実習における観察、記録及び評価</li></ol></li><li>5. 事後指導における実習の総括と課題の明確化<ol style="list-style-type: none"><li>(1) 実習の総括と自己評価</li><li>(2) 課題の明確化</li></ol></li></ol>
<p>〈科目名〉 保育実習Ⅱ（実習・2単位：保育所実習）</p>
<p>〈目 標〉</p> <ol style="list-style-type: none"><li>1. 保育所の役割や機能について具体的な実践を通して理解を深める。</li><li>2. 子どもの観察や関わりの視点を明確にすることを通して保育の理解を深める。</li><li>3. 既習の教科や保育実習Ⅰの経験を踏まえ、子どもの保育及び保護者支援について総合的に学ぶ。</li><li>4. 保育の計画、実践、観察、記録及び自己評価について実際に取り組み、理解を深める。</li><li>5. 保育士の業務内容や職業倫理について具体的な実践に結びつけて理解する。</li><li>6. 保育士としての自己の課題を明確化する。</li></ol>

〈内 容〉

1. 保育所の役割や機能の具体的展開
  - (1) 養護と教育が一体となって行われる保育
  - (2) 保育所の社会的役割と責任
2. 観察に基づく保育理解
  - (1) 子どもの心身の状態や活動の観察
  - (2) 保育士等の動きや実践の観察
  - (3) 保育所の生活の流れや展開の把握
3. 子どもの保育及び保護者・家庭への支援と地域社会等との連携
  - (1) 環境を通して行う保育、生活や遊びを通して総合的に行う保育の理解
  - (2) 入所している子どもの保護者支援及び地域の子育て家庭への支援
  - (3) 地域社会との連携
4. 指導計画の作成、実践、観察、記録、評価
  - (1) 保育課程に基づく指導計画の作成・実践・省察・評価と保育の過程の理解
  - (2) 作成した指導計画に基づく保育実践と評価
5. 保育士の業務と職業倫理
  - (1) 多様な保育の展開と保育士の業務
  - (2) 多様な保育の展開と保育士の職業倫理
6. 自己の課題の明確化

〈科目名〉

保育実習指導Ⅱ又はⅢ（演習・1単位）

〈目 標〉

1. 保育実習の意義と目的を理解し、保育について総合的に理解する。
2. 実習や既習の教科の内容やその関連性を踏まえ、保育実践力を培う。
3. 保育の観察、記録及び自己評価等を踏まえた保育の改善について実践や事例を通して学ぶ。
4. 保育士の専門性と職業倫理について理解する。
5. 実習の事後指導を通して、実習の総括と自己評価を行い、保育に対する課題や認識を明確にする。

〈内 容〉

1. 保育実習による総合的な学び
  - (1) 子どもの最善の利益を考慮した保育の具体的理解
  - (2) 子どもの保育と保護者支援
2. 保育実践力の育成
  - (1) 子どもの状態に応じた適切なかわり
  - (2) 保育の表現技術を生かした保育実践

3. 計画と観察、記録、自己評価
  - (1) 保育の全体計画に基づく具体的な計画と実践
  - (2) 保育の観察、記録、自己評価に基づく保育の改善
4. 保育士の専門性と職業倫理
5. 事後指導における実習の総括と評価
  - (1) 実習の総括と自己評価
  - (2) 課題の明確化

## 本学における実習指導

本学においては、平成17年9月に開催された全国保育士養成協議会において専門委員より報告された『保育実習指導のミニマムスタンダード』をうけて、実習指導において学生による実習の自己評価をどのように行うかを検討してきた。平成19年度生までは、園評価をもとに個別面接において、自己の振り返りを促していた。しかし、平成20年度生からは、評価票項目と同じ項目について、実習中に毎日の自己チェックを行わせた。個別面接は、その自己チェック表と園評価票をもとに行うようにした。

原は(2006)、自己評価と園評価との関係において、従来指摘されているように園評価と自己評価とのズレと一致する因子を報告している。まとめとして、「実習状況における実習への取り組みの因子は自己評価に対しては全ての側面で正の関係が見られたが、一方で園評価とは全く関係は見られなかった。」「乳幼児との関わりが良くとれたことが、自己評価における実習態度や積極性の評価に影響し、園評価の中の保育力の評価に影響している」「自己を十分に発揮できたことが、同様に自己評価に影響するとともに、園評価における実習意欲、保育力、保育者としての資質に影響する」としている。原や山田ら(2010年)が行っている学生による自己評価は、実習終了後の反省とともに行われている。

本学の学生の自己評価は、実習中に毎日行うことを基本としている。そして、11日間の実習を終えて改めて全体を振り返ることを課した。

この二重の振り返りが自己評価の深化につながるのではないかと考えている。

## 方 法

### 調査対象者

調査はB短期大に在籍している学生を対象とした。対象学生数及び実習時期は表2に示す。自己チェック未実施は平成18年度・平成19年度、自己チェック実施は平成20年度・平成21年度である。

表2 対象年度及び対象学生数

		保育所実習Ⅰ	保育所実習Ⅱ
自己チェック未実施	平成18年度学生	200名	197名
	平成19年度学生	190名	186名
自己チェック実施	平成20年度学生	167名	159名
	平成21年度学生	158名	155名

## 手 続 き

実習園からの評価である保育所実習Ⅰ及び保育所実習Ⅱの評価票を基に分析を行った。各評価項目の評価は、平成18年度・平成19年度ではA 良い、B 普通、C 努力を要する、D 特に努力を要するの4段階評価を行った。平成20年度・平成21年度では更にAA 特に良いを加えた5段階評価を行った。今回は、AA・A=4、B=3、C=2、D=1と得点化し分析を行った。評価項目は表3表4に示す。

### 評価票の構成

保育所実習Ⅰと保育所実習Ⅱでは実習目的が



異なるため、評価票の項目が若干異なっている。保育所実習Ⅰでは、表3の10項目。保育所実習Ⅱでは、表4の11項目で構成されている。

表3 保育実習Ⅰ評価票の構成

質問項目1	乳幼児期の発達過程についての観察と理解に努力
質問項目2	一人一人の欲求や気持ちを読みとる努力
質問項目3	養護面(食事・排泄等)への適切な関わり方への努力
質問項目4	一人一人への細やかで丁寧な対応に努力
質問項目5	一人一人の遊びの理解と援助への努力
質問項目6	子どもと共に楽しむ遊びの工夫
質問項目7	より良い環境づくりへの配慮や工夫
質問項目8	保育室等の清掃・整理
質問項目9	保育の記録・反省等の記入及び提出
質問項目10	自分自身の健康や体力の維持

表4 保育実習Ⅱ評価票の構成

質問項目1	乳幼児期の発達過程についての観察と理解に努力
質問項目2	一人一人の欲求や気持ちを読みとる努力
質問項目3	養護面(食事・排泄等)への適切な関わり方への努力
質問項目4	一人一人への細やかで丁寧な対応に努力
質問項目5	子どもと共に楽しむ遊びの工夫
質問項目6	保育内容・家庭環境・教材研究等の積極性
質問項目7	子どもの立場に立った計画立案への努力
質問項目8	子ども自身の活動となるような展開への努力
質問項目9	保育室等の清掃・整理
質問項目10	保育の記録・反省等の記入及び提出
質問項目11	自分自身の健康や体力の維持

## 結果と考察

保育実習Ⅰの評価項目の各評価項目について分散分析を行った結果、自己チェック実施によ

り群の効果が有意であったのは、質問項目2 ( $F(3, 710) = 14.755, P < .001$ )、質問項目3 ( $F(3, 708) = 14.977, P < .001$ )、質問項目5 ( $F(3, 708) = 9.399, P < .001$ )であった(表5)。Tukey HSD法を用いて多重比較を行った結果によると、質問項目2、質問項目3、質問項目5では、自己チェック未実施時の平均と自己チェック実施時の平均では5%水準で有意な差が見られた。このことから、自己チェックによる日々の振り返りにより実習中に努力すべき点の中でも、「一人一人の欲求や気持ちを読みとる努力」や「養護面(食事・排泄等)への適切な関わり方への努力」、「一人一人の遊びの理解と援助への努力」の3点において特に効果があったと考えられる。

このことは、本学で保育実習Ⅰにおいては、三歳未満児クラスにおける実習を中心に設定していることと関係があるのではないかとと思われる。三歳未満児クラスでは、実習生一人に対しての子どもの数が少ないため、「一人一人の欲求や気持ちを読み取る努力」や「一人一人の遊びの理解と関わり方への努力」のように、子ども一人一人に対して学生も十分目を向けることができるのではないだろうか。そのことを、自己チェックにより意識し努力することができたのではないか。また、三歳未満児では、排泄面ではトイトトレーニングの時期であることや、食事面では離乳期から普通食への移行、スプーンやフォークからお箸への移行などの時期である。そのため「養護面(食事・排泄等)への適切な関わり方への努力」の項目は、学生が具体的にできることがあり、関わりをどのようなものであるかがイメージしやすいのではないかと考えられる。

保育実習Ⅱの自己チェック表の検討においては、実習後の回収率が悪く、数値として信憑性に欠けるため割愛する。

表5 保育所実習Ⅰ（各項目の平均及び多重比較の結果）

	18年度	19年度	20年度	21年度	F 値	Tukey HSD による多重比較
質問項目 2	1.81	1.83	1.52	1.50	14.755***	19年度<18年度<20年度<21年度
質問項目 3	1.87	1.84	1.54	1.60	14.977***	19年度<18年度<21年度<20年度
質問項目 5	1.76	1.85	1.59	1.56	9.399***	19年度<18年度<20年度<21年度

\*p<.05 \*\*p<.01 \*\*\*p<.001

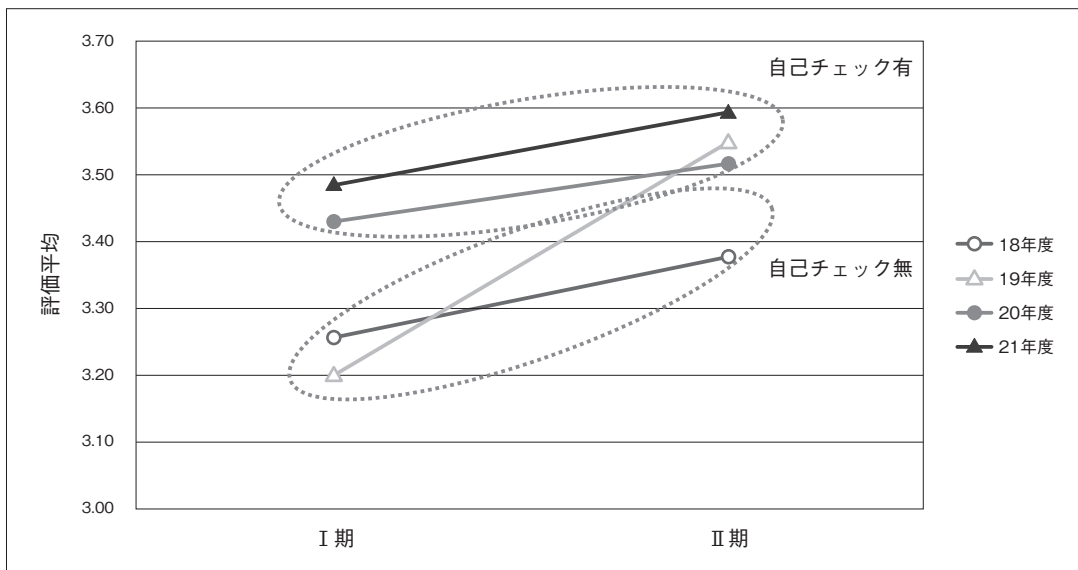


図1 I期・II期の保育実習における実習施設の評価の変化

### 自己チェック表からみた考察

11日間の実習期間中に評価票の項目と同じ視点で学生自身が日々、自己の実習における評価を記録した自己チェック表をいくつか抽出し、実習に臨む姿勢や意識の変容と自己評価の関係、および実習園からの評価との関係性について考察を行う。

#### ①ケース1

1年次の保育実習Ⅰにおいて、実習園からの評価の中で、「積極性」を自己の課題として位置付けて臨んだ保育実習Ⅱの自己チェック表における「明日の目標」の欄には、前半の初日から4日間において『積極的に話しかけて』や『積極的な行動』、『子ども達と深く関わりを持ち、特性を知ろうと努める』など実習に対して積極的に取り組もうとしている姿を捉えることがで

きる。さらに後半の5日目以降では、「積極性」以外の「保育計画・展開」など別の目標を掲げ、実習に臨んだ姿が記録されていた。

実習園からの評価票においても、『実習に対して一生懸命に取り組もうとする気持ちがよく伝わってきた』という記述がされていた。

#### ②ケース2

1年次の評価票において「一人一人への細やかで丁寧な対応」という項目以外は高い評価を得ていたことにより、2年次の実習での目標を子どもとの関わりに注視して取り組み、『一人一人にきちんと関わる』『積極的に一人一人と関わる』といった日々の目標を掲げ、重点的に意識し、2年次の評価票において課題としていた項目である「一人一人への細やかで丁寧な対応」が最高の評価となった。

#### ③ケース3

自己チェック表の全体の感想の中で『自分の



得意なことと、不得意なことがこの表をつけて分かったので、不得意な所は特に注意したいと思った』と記述されている。実習を日々、ふりかえり、最終的に自己の成果と課題を見出すことができ、次の実習へと繋いでいこうとする姿勢を捉えることができた。

#### ④ケース4

1年次の保育実習Ⅰにおける実習園からの評価はどの評価項目においても高く、その上で2年次での保育実習Ⅱに臨む姿勢を、最終的に振り返った際のコメントとして『日々、自分をチェックすることにより、自分にきびしくしながら実習をすることができた』と述べている。さらに、『明日の目標を毎日考えることができ、実習に臨むことができた』とも述べられている。

また、全体の感想の中で『自分の評価なので、実際どうなっているのかわかりませんが、自分なりに子ども達と楽しく過ごすことができた』と述べている。

結果として、保育実習Ⅱにおける評価票はさらに1年次よりも向上することが出来た。1年次における評価も十分高く評価されている中で、自己の実習を日々、確認していきながら自分の取り組む姿勢を律していくことができ、それが評価の向上へと繋がった事例と言える。

#### ⑤ケース5

1年次の実習評価を受けて『今回の実習では、前回の実習での園からの評価は、自己評価より厳しく、しっかりと見なおしていく必要がある』と思い、自分に厳しく評価していこうと思った』と記述されている。1年次の評価票と2年次のものを比較してみると日々の自己評価が厳しくなっている項目については、結果的に実習園からの評価が上がっている。

自己の実習を振り返り、自己評価が甘すぎたことを意識することにより、次の実習において自己を振り返る視点を挙げ、結果的には実習における取組みの向上のきっかけとなったと言える。

#### ⑥ケース6

この事例は2年次の実習のみでの考察となるが、日々、自己チェックを行う中で「明日の目

標」の欄には評価票の項目と同じ内容の課題が毎日記述されている。それは、一日一日の実習の中で最も課題として挙げられる事項を翌日の課題と設定し、それを意識したことにより、自己評価の上ではあるが、課題とした日のその項目について自己評価は向上している。それは全体の感想の中にも記述されており、『毎日、チェックしていくことで、できなかった事が自己反省でき、次の日は反省を活かしてCやDがA、Bになるように頑張りました』と日々の自己評価を意識して、翌日の実習に臨んだこととして裏付けられる。

しかし、『全体を見てみると最後までCやDで終わった所もあり、改善して実習に取り組むことができなかったのだと感じた』と自己の実習のふりかえりを客観的に行えていることがわかる。

今回のケースでは2年次の実習11日間の中で、実習中に毎日、自己評価をつけることで、日々の課題を明確にして、取り組む姿勢が確実に変化したことを自己確認できたという事例である。実際の実習園からの評価票を見ても、評価は全体的に向上していた。

### ケース全体の考察

あくまでも今回取り上げた6つのケースは自己チェック表に日々の課題が明確になったことが記述されているものを取り上げているが、実際には、日々、自己評価することが翌日の実習に対する意識や取り組みに影響を与えている事例が他にもあると予想される。

自らの実習の自己チェックを毎日行うことで翌日の実習の姿勢が変わることや、実習を終えて、全体を振り返る際の判断材料として日々つけている自己評価により、客観的に反省できた様子も伺える。さらには、1年次の自己評価と実習園からの評価票を照らし合わせたことで、これまで自己チェック表を導入していなかった時には、漠然としか自分の実習を振り返ることができなかったものが、克明かつ詳細に日々を振り返ることができたことが分かる。

## 実習園からの評価票からみた考察

実習園からの評価票から学生の実習の到達度がどのように変容したのかを考察する。

今回、自己チェック表を導入する前の平成18年度生・19年度生と、自己チェック表を実施した20年度生・21年度生の実習園からの評価票を比較し、そこに何らかの違いがあるのかを比較検討した。

図1は保育実習Ⅰと保育実習Ⅱにおける実習園の評価平均を年度ごとに示したものである。18年度・19年度の評価項目と20年度・21年度の評価項目は一部異なっているため、平均処理は共通の項目(8項目)を対象とした。調査したどの年度においても保育実習Ⅰに比べ、保育実習Ⅱの評価が上昇する傾向がみられたが、中でも自己チェックを実施した20年度と21年度については、保育実習Ⅰの実習の段階ですでに例年より高い評価が得られている。自己チェック表を導入する以前には、実習の目標が漠然としていた。しかし、20年度以降、自己チェック表を意識することにより、実習に取り組むスタートの段階での姿勢が違ってきており、モチベーションも高くなることによる結果だと言える。

## 今後の課題

今回の検証で得られた実習中における自己チェック表による自己評価の有効性は明確には得られなかったが、それは、実習指導におけるプログラムや担当者の指導法を検討することにより、十分期待できるものであるといえる。保育実習は、園評価が結果ではなく保育士養成課程におけるプロセスであり、学生自身が実践を通して既習科目を包括的に捉え直す機会である。さらに、自己の課題を見だし、次なる学習へのモチベーションを高める機会でもある。実習指導における自己評価の在り方が保育士養成の中核であると言っても過言ではないであろう。

来年度、本学の実習評価票を全面的に変更す

る予定である。評価項目は、大分県内はもとより九州内にある他の養成校と同一のものとなっている。だからこそ、自己評価の在り方を検討し、より質の高い保育士養成を実現していきたい。

## 参考文献

- 1) 全国保育士養成協議会編 『保育実習指導のミニマムスタンダード』 北大路書房 2007 2頁